

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

スナヤツメ南方種

Lethenteron sp. S.

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵8

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

生息地における生息条件の悪化が進み、近年、生息数が激減傾向にある。また、生息範囲も限定されている。

【概要】

全長15cm程度。円口類と呼ばれる無顎綱の仲間、原始的な脊椎動物である。体は細長く、後半部でやや側扁する。口は円盤状で、顎がなく、眼の後ろに鰓孔が7つある。近縁種のカワヤツメは河川と海を回遊するが、本種は河川の中上流域で一生涯を過ごす陸封型である。川底の砂泥中に産卵し、生まれた幼生（アンモシーテス）はそのまま柔らかい砂泥の中で、有機物や珪藻などをロート状の口で食べている。幼生は数年を経て秋に変態して成体となり、翌年の春に産卵し斃死する。近年の研究から、本種は遺伝的に隔離された2集団（北方種と南方種）が確認されている。これらは形態からの識別は難しく、DNA解析を行う必要がある。

【県内での生息地域・生息環境】

県内の大型河川の中上流域やそこにつながる用水路の砂泥底部に生息する。特に、水がきれいでも水の通りがよい細砂と多少泥の混じる場所を好む。河川には比較的良好な生息場所が残っているが、それらにおいても近年は減少が著しい。1960年代まで県内の大中河川に普通に生息していたが、河川改修工事によって川筋が直線化し、川本来の多様な形態が失われ、生息環境が喪失している。

【存続を脅かす原因】

河川改修に伴うコンクリート護岸化や直線化、水質汚濁による生息条件の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○									○					○					

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

カワヤツメ

Lethenteron japonicum (Martens, 1868)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

本県西部を南限とする北方系種であり、もともと生息数は少ない。近年は河川改修工事等による生息環境の悪化により、多くの河川では絶滅かもしくはきわめてまれな種となっている。

【概要】

円口類に属し、口は吸盤状で顎がなく、内骨格はすべて軟骨性である。脊椎動物の中でもっとも原始的なグループに属する。体側の前部にえら穴が7つ並び、本物の目と合わせて「八つ目」と呼ばれる。回遊性で、河川で生まれた幼生はアンモシーテスと呼ばれ、2～3年間河川にとどまって泥の中の有機物や珪藻を食べて生活する。幼生はやがて変態して成体の形態となって海に降り、吸盤状の口で他の魚に吸い付いて体液を吸うといわれる。そして数年間における海域での生活を経て、再び河川に遡上し、産卵してその生涯を閉じる。北海道と茨城県、島根県以北の本州に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

本県においては、ほとんどの1級および2級河川での生息が知られているが、現在ではどこもきわめてまれである。宍道湖・中海では、時折定置網に入ることがあるので、流入河川で繁殖が行われているようで、実際に、中流域から下流域にかけて幼魚や変態した降海前の幼魚が採集されることがある。生息密度はごく低い。近年は、繁殖の為に河川に遡上する個体がほとんど見られなくなっている。

【存続を脅かす原因】

幼生は、川の流れのゆるやかな澄んだ砂泥底に潜伏して生活しており、近年の河川改修工事によってその生活環境は真っ先に影響を受けてきた。さらに、多くの河川に随所に設けられたダムや大小の堰堤によって、海とのつながりが妨げられていることも大きな要因である。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	○	○									○					○					○	○

サケ目サケ科

サクラマス

Oncorhynchus masou masou (Brevoort, 1856)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧 (NT)

【選定理由】

本種は、ヤマメ（河川生活タイプ）の降海したもので、県内はヤマメの自然分布の南方に位置し、もともと降海する割合は北日本に比べ少ない。近年はさらに降海する個体が減少している。

【概要】

全長40－60cm。先に述べた、ヤマメの降海したもので、パーマーク（楕円形の斑紋）が消失して全体が銀白色となり、背びれの先が黒くなる（銀化（ギンケ）またはスモルト）。河川の上流域で生まれてから、1年目の春に降海するものが多い。降海後は近海でオキアミや小魚などを食べ、翌年の春に40－60cmに育って河川を遡上し、その秋にヤマメに混じって産卵し死亡する。北海道・東北・箱根以東の関東・北陸・山陰・九州の瀬戸内海に注がない河川に分布する。それ以外の地域には、体側に朱点の散在する近縁のサツキマス（アマゴ）の分布域となる。国外では、樺太・朝鮮半島の東側・台湾に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

本県では、沿岸の定置網にまれに入ることがある程度で、その数は少ない。宍道湖中海水域では20年ほど前までは、1棟の網で年間10尾程度獲れていたが、近年はほとんど漁獲されない。

【存続を脅かす原因】

森林伐採や砂防ダムおよび河川改修工事によるヤマメの生息環境の悪化があげられる。流域に設けられた魚道が十分に機能しないことや、各種のダムや堰堤によって、海との繋がりが断ち切られていることも原因である。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
○	○	○									○					○					○	○

トゲウオ目ヨウジウオ科

ヨウジウオ

Syngnathus schlegeli Kaup, 1856

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

中海を中心に生息しており、定置網などで時折混獲されているが、近年確認される機会が減少している。

【概要】

全長30cmほど。日本産ヨウジウオ類では大型の部類。体は大輪でおおわれて、吻は長い筒状で腹びれはない。体色は褐色で不規則な模様のあるものや緑銀色のものなど変異に富む。中海で同所的に生息するガンテンイシヨウジは吻が短いことなどから区別できる。北海道以南の日本各地、朝鮮半島、中国、台湾、東シナ海、南シナ海、トンキン湾、沿海州の沿岸域の浅い内湾に生息する。アマモ場に多く生息している。底生性だが、胸びれと背びれをせわしなく動かして浮遊している。プランクトンを吸い込むようにして食べる。メスがオスの育児嚢に産卵してオスがふ化するまで育てる。産卵期は、3月中旬から6月頃で、体長10mmで産出されるが遊泳能力はきわめて低く、稚魚は流れ藻とともに採集されることが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

中海を中心に大橋川や宍道湖東岸のアマモ場で確認されている。2000年頃から中海での定置網による漁獲数が減少傾向になり、2005年以降著しく減少している。近縁種のガンテンイシヨウジは、太平洋沿岸に多く分布しているが、近年の水温上昇の影響により、宍道湖の全域と大橋川、中海で普通に見ることができる。ヨウジウオとガンテンイシヨウジともに宍道湖西岸の塩分濃度の低い水域でも見られることがある。

【存続を脅かす原因】

アマモ場の消失など環境の改変による生息環境の悪化。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	○	○																			○	○

汽水・淡水魚類

絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

トゲウオ目ヨウジウオ科

サンゴタツ

Hippocampus mohnikei Bleeker, 1853

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

中海を中心に生息しており、定置網などで時折漁獲されているが、近年確認される機会が減少している。

【概要】

全長8cmほど。日本産タツノオトシゴ類ではもっとも小型。タツノオトシゴに似るが頂冠がなめらかなことや生息域が異なる。体は大輪でおおわれて、吻は筒状で腹びれはない。タツノオトシゴの仲間の中では吻は短い部類に入る。黒色や黄色など体色の変異に富む。北海道から九州西部、東シナ海、中国の沿岸域の浅い内湾に生息する。アマモ場に多く生息し、海草に尾部を巻き付けて体を支え、浮遊しているプランクトンを吸い込むようにして食べる。本州中部での産卵期は春から秋で、メスがオスの育児嚢に産卵して、オスがふ化して泳ぎ出てくるまで育てる。孵化直後の仔魚は3.5mm程度で、8mm程に成長すると泳ぎ出てくる。稚魚は表層を漂い、流れ藻などについていることが多い。世界的に漢方薬の原料とし

てなどの需要により、乱獲が進んでいることから、絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約の付属書Ⅱ（輸出入許可必要）にタツノオトシゴが記載されている。

【県内での生息地域・生息環境】

中海を中心に大橋川や宍道湖東岸のアマモ場で確認されている。島根県立宍道湖自然館の採集記録(未発表データ)によると近年、採集個体数が著しく減少している。

【存続を脅かす原因】

アマモ場の消失など環境の改変による生息環境の悪化。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	○	○																			○	○

スズキ目カジカ科

カジカ(大卵型:河川陸封型)

Cottus pollux Günther, 1873

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧 (NT)

【選定理由】

本種は、河川の水質や水生生物の生息環境が良好に保持されていることを示す代表的な種であるが、すべての生息地において河川の生息環境が悪化し、個体数が減少している。

【概要】

日本固有種で、大卵型、中卵型・小卵型(ウツセミカジカ)があり、これらはすでに種レベルにまで分化していることが知られている。大卵型は河川の上流域に生息し、海に下ることはない。県内には、大卵型と中卵型が生息していると考えられるが、詳細な調査は行われていない。全長7-9cmで、時に12cmに達することもある。瀬の砂礫底や礫底に生息する底生魚である。体色は周囲の環境や体調によって異なり、灰褐色から暗褐色まで変化に富んでいる。体側に、4~5個の暗色の斑紋がある。体形はハゼ類に似るが、カジカ類にはうろこがないことや、頭部側面に棘を有することなど区別できる。水生昆

虫や小型甲殻類、時には小魚も食べる。産卵は、3月中旬から6月中旬で、川の瀬の石の下側にオスが空間を作り、メスを誘って石の下面に卵を産みつけさせる。

【県内での生息地域・生息環境】

県内において生息が確かめられている河川は、高津川、江の川、神戸川、斐伊川、飯梨川などの大型の河川である。河川によっては、中~下流に両側回遊性の中卵型(ウツセミカジカ)が、上流部に陸封性の大卵型(カジカ)が生息している。

【存続を脅かす原因】

河川改修に伴う人工護岸や河川構築物の影響、ダムによる流量の減少など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
○	○	○				○					○											

スズキ目ドンコ科

イシドンコ

Odontobutis hikimius Iwata and Sakai, 2002

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

生息域は局所的で、生息域での繁殖は確認されているが、生息数はあまり多くない。鑑賞魚として乱獲されるおそれがある。

【概要】

高津川水系匹見川で採集された個体に基づき、2002年に新種として記載された。外部形態はドンコによく似るが、遺伝的に大きく離れているほか、後鼻孔から眼窩後方に伸びる孔器列とえら蓋上にある孔器列に違いが見られることや、うろこが小さく数が多いなどの違いがある。また、下顎下面の斑点の黄色味が強く、体高が低い傾向にある。ドンコが流れの比較的緩やかな場所を好むのに対し、本種は流れが速く石がごろごろしているような場所がよく見られ、川底の石の隙間に身を潜めていることが多い。5～7月の産卵期になると、オスはふだん隠れがにしている石の下にある砂や小石を口で掘り出して産卵室を作る。メスは産卵室の天井部分に産卵することが

多いが、壁面にまでおよぶこともある。卵は楕円形で、附着糸により産卵基質に付着する。産卵・放精後、オスはすぐにメスを追い出す。その後オスはふ化するまで卵のそばで胸びれを使って卵に新鮮な水を送り、卵に酸素を供給する。

【県内での生息地域・生息環境】

高津川水系とその周辺にしか生息しておらず、きわめて局所的。匹見川がおもな生息地で、高津川本流での生息数は少ない。

【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化やドンコとの交雑などが危惧される。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
		○				○					○										

スズキ目ハゼ科

ルリヨシノボリ

Rhinogobius sp. CO

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

県内において本種の生息が確認されているのは、3つの河川と1つの湖沼だけである。生息数も少なく、いずれの地域においても近年個体数が減少してきており、中には絶滅した可能性の高い河川もある。

【概要】

ヨシノボリの仲間、形態、生態の両面で変異性に富み、現在全国の河川・湖沼に生息するものは10種以上に分類されている。県内には、両側回遊性のものが5種と、河川陸封性のものが1種生息している。ヨシノボリの中では大型で全長7～10cm、時に12cmに達するものもある。生時に頬に美しいルリ色の小さな斑点が散在する。しかし、標本では、そのルリ色斑点は消失するので、尾びれ基部にある太い八字状の濃色斑などが手がかりとなる。北海道から九州にかけての日本全国の小・中河川の中～上流域に生息し、まれに湖沼に陸封されている個体群もみられる。河川の早瀬から淵頭にかけての急流部に生息

していることが多い。雑食性で、附着藻類や小型の水生昆虫をおもな餌としている。西日本での産卵は5～7月で、オスが半ば砂に埋まった石の下に産卵室をつくり、メスが天井面に卵を産みつける。県内では、日本海に注ぐ河川勾配が大きく、水量の豊かな小・中河川の早瀬に生息しているほか、堰止め湖に陸封された個体群も確認されている。

【県内での生息地域・生息環境】

県内中東部の河川のほか、堰止め湖でも確認されている。

【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化、湖沼においてはオオクチバスの放流など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○					○	○				○										

汽水淡水魚類

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

シンジコハゼ

Gymnogobius taranetzi (Pinchuk, 1978)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

写真 口絵9

島根県固有評価：分布域限界種

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

本種は、おもに汽水域に生息しており宍道湖以外の水域でも確認されているが、その確認場所および生息数は少ない。

【概要】

全長メス6cm、オス5.5cm。中海に多い近縁のピリングゴとは酷似するが、メスの婚姻色と頭部の感覚器官の形状で識別できる。婚姻色は本種が体側に6~7本のあざやかな橙色の横斑が現れるのに対してピリングゴの場合はそれがない。また、頭部の感覚器官では、本種が感覚管の両端2個の感覚孔が開いているに対して、ピリングゴでは管が連結していて孔は3個開いている。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖での産卵は3月から4月上旬にかけて、オスが湖底に巣穴を掘ってメスを誘って行われる。孵化した仔魚は、わんどや船着場などの風波を避ける場所に集まって浮遊生活をおくる。成長は早く、夏過ぎには親魚サイ

ズにまで達し、秋の深まりとともに生殖巣が発達してくる。食性は稚魚・成魚ともに、イサザアミ・ユスリカの幼虫・ゴカイ類・コツブムシなどの底生動物の他に藻類も食う。2000年頃までは、宍道湖全域で確認されたが、2009年以降は生息数が減少している。現在は、宍道湖西岸と周辺の水路、安来市の中海流入河川の水路で見られる。国内では、富山県、石川県、他にロシア沿海州や朝鮮半島からも確認されている。益田市にも生息が確認されていたが、近年見られなくなり絶滅した可能性が高い。また、松江近郊の溜池にも生息し、陸封の可能性が高い。最近の研究では、ロシアや韓国産の*Gymnogobius taranetzi*と国内に分布するシンジコハゼとは、遺伝的に分化が認められるとしている。

【存続を脅かす原因】

わんどや旧来の船着場などの、仔稚魚の生育する場所を保全することが必要。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎		△															○				○	○